

わがまち歴史散歩

江戸時代後期、神輿渡御の復活記録

○池田市民の誇り

江戸時代から明治期まで、町の人びとのくらしを知る上で池田に「伊居太神社日記」と「稲束家日記」が残されていることは全国的に見ても素晴らしいことです。両方とも、読みにくい文字を活字に変えて本にしています。池田市の誇りといつていいでしょう。

ただし、内容の理解にはかなりの知識と努力が必要です。例えば人物。初めは何者か少しも分かりません。日記の記述者との関係も、社会的な役職名もまず明示されません。それが、次々と出てくるのです。特に「伊居太神社日記」では記述が細部にわたって、かえって脈絡が取りにくい感があります。

しかし、こうした難関を乗り越えたとき、思いもつかなかった歴史的な事実がいっぱい見えてくるのです。今回は伊居太神社と呉服神社で江戸後期、賑やかに行われていた秋の神輿と太鼓の渡御の復興について見ていきましょう。

○神輿・太鼓の渡御が復活

そもそも神社の祭において神輿



池田村旧町名

(御輿)渡御はどんな位置を与えられていたのでしょうか。

池田では荒木村重の戦乱後豊臣家のもとで世が治まってからも、150年以上にわたって渡御が途切れていました。「穴織宮拾要記」という史料には、伊居太神社が御旅所のあった小坂田への渡御を試みたところ、その地の人びとから通行を阻止され、御輿も壊されたと書かれています(136号)。

神輿渡御の復興が具体化するのには、寛延3年(1750)のことでした。『新修池田市史』第5巻(民俗編)第二章第1節で詳しく紹介されていますが、ここではさらに事実を付け足して考察してみよう。

まず、「伊居太神社日記」同年6月21日には「神輿寄合」が開かれ

たとの記事があります。そこには、本町、荒木町、立石、米屋町、西ノ口、柳屋町、新材木町、元新町、北ノ口、甲加谷、大西、寺垣内、米山、中ノ町、それに小坂田村の合計14町と1村、57人が集まったと記録されています。伊居太神社を支える氏子町々が神輿渡御を希望したのです。

宝暦2年(1752)4月7日には大坂から神輿が船積みされて到来し、氏子中が迎えに行き、翌日には参詣者が大勢集まりました。ただし、この年の秋祭りに渡御はなく、宝暦4年9月17日、「初めて神輿出る」として、米屋町はじめいくつかの町を廻り、七ツ時(午後4時〜5時頃)宮へ入ったと記されています。また、続いて「太鼓方々へ行き本養寺借り昼食、夜五つ時宮へ入る。才二メ(貫)三百□十文よる(寄る)とも。ちようちん両夜灯し」とあります。

「才」というのが「さいせん」とすれば、神社では、ひとり一文とみて少なくとも1000人から2000人以上の参拝者を得たと考えられます。神輿渡御は町の人びとの心を高ぶらせ、喜ばせたのです。まもなく氏子町を中心に

神輿講・太鼓中といった組織も作られます。宝暦7年には囃子獅子も出てきます。

一方、呉服神社の動きは定かではありませんが、ほぼ同様だったと思われる。

○続けられた行事

「伊居太神社日記」はこのあと明和2年(1765)までと同9年(安永3年(1774))5月、同7年(8年)と残されましたが、そのあとは文化5年(1808)まで原本自体が分からなくなっています。ただ、文化6年9月27日に、前回紹介した大戸(大和)屋勝左衛門が宮司家の跡をとり、改めて日記をつけ始めます。彼は翌年9月17日に「今日神事也、賑々しく御座候」と記しています。

神輿渡御はここまで休まず続けられていたのです。近郷の町々でも人びとは楽しみにしていました。中ノ町に住んでいた稲束家の日記寛政6年(1794)9月17日には「神輿渡行有」と書かれ、さらに親類から見物客が来たことが記されています。

(市史編纂委員会委員長・小田康徳)

◆問い合わせは生涯学習推進課 市史編纂 ☎754・6674